

真言七重勝劣

文永七年

四九歳

(法華大日二經七重勝劣事)
(真言七重勝劣事)

- 法華・大日二經の七重勝劣の事
- 尸那・扶桑の人師一代を判ずる事
- 鎮護国家の三部の事
- 内裏に三つの宝有り、内典三部に当たる事
- 天台宗に帰伏する人々の四句の事
- 今經の位を人に配する事
- 三塔の事
- 日本国仏神の座席の事
- 法華・大日二經の七重勝劣の事

法華經

已今当第一

第一

「藥王今汝に告ぐ、諸經の中に於て最も其の上在り」

本門第一
迹門第二

涅槃經

第二

「是の經の世に出づる」

無量義經

第三

「次に方等部十二部經摩訶般若華嚴海空を説く。真實實甚深」

甚深真

第四

華嚴經

第五

般若經

第六

上に云はく「三部の中に於て此の經を王と為す」
中に云はく「猶成就せずんば当に此の法を作すべし。決定として成就せん。所謂乞食

・精勤・念誦・大恭敬・巡八聖跡・礼拝

行道なり。或は復大般若經七遍或は一百遍轉読す」

下に云はく「三時常に大乘般若等の經を讀め」

大日經

第七

三國に未だ弘通せざる法門なり。

尸那・扶桑の人師一代の聖教を判ずる事

華嚴經

第一

南北の義

晋齊等五百余年。三百六十余人、光宅を以て長と為す。

涅槃經

第二

般若經

第一

吉蔵の義 梁代の人なり。

法華經

第一

涅槃經

第二

天台智者大師の御義

南岳の御弟子なり。妙楽等之を用う。陣・隋二代の人なり。

華嚴經

第三

深密經

第一

法華經

第二

玄奘の義 唐の始め太宗の御宇の人なり。

般若經

第三

華嚴經 第一
法華經 第二
涅槃經 第三
法蔵・澄観等の義 唐の半ば則天皇后の御宇の人なり。

大日經 第一
法華經 第二
諸經 第三
善無畏・不空等の義 唐の末玄宗の御宇の人なり。

法華經 第一
涅槃經 第二
諸經 第三
伝教の御義 人王五十代桓武の御宇及び平城・嵯峨の御代の人。比叡山延暦寺なり。

大日經 第一
華嚴經 第二
法華經 第三
弘法の義 人王五十二代嵯峨・淳和二代の人。東寺・高野等なり。

大日經 第一
法華經 第二
慈覚の義

善無畏を以て師と為す。仁明・文徳清和の三代。叡山講堂総持院なり。智
証之に同じ。園城寺なり。
諸經 第三

鎮護国家の三部の事

法華經 不空三蔵 大曆に法華寺に之を置く。大曆二年護
密蔵經 摩寺改め法華寺を立つ。中央
に法華經、脇士に兩部の大日なり。 仁王經

法華經 聖徳太子 人王三十四代推古天皇の御宇、四
浄名經 天王寺に之を置く。摂津
勝鬘經 国難波郡仏法最初の寺
なり。

法華經 伝教大師 人王五十代桓武天皇の御宇、比叡山延暦
金光明經 寺止観院に之を置く。年分得度者 一人遮那業
一人止観業

仁王經

大日經 慈覺大師 人王五十四代仁明天皇の御宇、比叡山東塔の西総持に
金剛頂經 御本尊大日如来金蘇の二疏十四卷安置せらる。
蘇悉地經 内裏に三の宝有り、内典の三部に当たる事

神璽 国の手驗なり
宝劍 国敵を禦ぐ財なり。平家の乱の時海に入りて見え
内侍所 天照太神影を浮かべ給ふ神鏡と云ふ。左馬頭頼茂
に打たれて焼失す。

一に身心俱に移る三論の嘉祥大師
天台宗に帰伏する人々に四句有り

華嚴の澄觀法師

二に心移りて身移らず
真言の善無畏・不空
華嚴の法蔵
法相の慈恩

三に身移りて心移らず 慈覺大師
智証大師
弘法大師
四に身心俱に移らず

今經の位を人に配する事

鎌倉殿

征夷將軍 無量義經
院攝政 涅槃經
天子 迹門十四品
本門十四品

三塔の事

傳教大師御建立 止觀・遮那の二業を置く。本尊薬師如来
なり。延暦年中御建立、王城の丑寅に当たる。桓武
天皇の御崇重。天子本命の道場と云ふ。

止觀院 天竺には靈鷲山と本院
云ひ震旦には天台と云ひ扶桑には比叡山と云ふ。三国伝灯の仏法此に極ま
り。講堂 慈覺大師の建立 鎮護国家の道場と云ふ。本尊大日如来なり。承
和年 総持院 中の建立。止觀院の西に真言三部を置く。承
是東塔と 云ふなり。傳教の御弟子第三の座主な
り。

釈迦堂 西塔
宝幢院 円澄の建立 傳教の御弟子なり
横川

日本国仏神の座席の事

問ふ、吾が朝には何れの仏を以て一の座と為し、何れの法を以て一の座と為し、何れの僧を以て一の座と為すや。答ふ、観世音菩薩を以て一の座と為し、真言の法を以て一の座と為し、東寺の僧を以て一の座と為すなり。

問ふ、日本には人王三十代に仏法渡り始めて後は山寺種々なりと雖も、延暦寺を以て天子本命の道場と定め、鎮護国家の道場と定む。然して日本最初の本尊釈迦を一の座と為す。然らずんば延暦寺の薬師を以て一の座と為すか。又代々の帝王起請を書きて山の弟子とならんと定め給ふ。故に法華経を以て法の一の座と為し延暦寺の僧を以て一の座と為すべし。何ぞ仏を本尊とせず、菩薩を以て諸仏の一の座と為るや。答ふ、尤も然るべしと雖も、慈覚の御時叡山は真言になる、東寺は弘法の真言を建立す。故に共に真言師なり。共に真言師なるが故に東寺を本として真言を崇む。真言を崇むる故に観音を以て本尊とす。真言には菩薩をば仏にまされりと談ずるなり。故に内裏に毎年正月八日、内道場の法行なはる。東寺の一の長者を召して行なはる。若し一の長者暇有らざれば、二の長者行なふべし。三までは及ぼすべからず云云。故に仏には観音、法には真言、僧には東寺の法師なり。比叡山をば鬼門の方とて之を下す。譬へば武士の如しと云ひて崇めざるなり。故に日本国は亡国とならんとするなり。

問ふ、神の次第如何。答ふ、天照太神を一の座と為し、八幡大菩薩を第二の座と為す。是より已下の神は三千二百三十二社なり。